岩手県立大学社会福祉学部紀要　第23巻　(2021. 3) 1 − 12

児童期における親の機能と祖父母の機能の比較
− 大学生を対象とした回想的方法による調査分析 −

桐野　南[1]・細越久美子[2]

A Comparison of parents and grandparents functioning in school age: A retrospective narrative analysis of the university students' experiences

KIRINO Minami[1] , HOSOGOE Kumiko[2]

本研究は児童期における親の機能と祖父母の機能について、特に受容機能と統制機能に着目して比較し、その違いの背景要因についても探索的に検討し明らかにすることを目的とした。研究１では大学生233名を対象とした質問紙調査を実施し、受容・統制両機能において母親が最も高く、祖父が最も低かったことがわかった。研究２では大学生17名を対象に半構造化面接を行い、受容機能では祖父母と両親の間で、〈褒め〉の頻度・量や〈傾聴〉に違いがみられ、統制機能では親は指示型であるのに対し祖父母は提案型をとる傾向があった。これらの違いの要因として、接触頻度の違いや世代間ギャップの程度の違い、養育責任の程度の違いが考えられた。
キーワード：親の機能、祖父母の機能、受容、統制

This study aims to compare the functioning of parents and grandparents in school age, focusing on receptive and control functions, and to explore the factors behind the differences. Study 1, a questionnaire survey of 233 undergraduates, revealed that mothers had the highest levels of both receptive and control functions, whereas grandfathers had the lowest levels. Study 2, a semi-structured interview of 17 undergraduates, revealed differences in the frequency and amount of <praise> and <listening> between grandparents and parents in terms of receptive functioning, whereas parents tended to be more directive in terms of control functioning compared with grandparents who were more suggestive. These differences could be attributed to differences in frequency of contact, generational gaps, and differences in nurturing responsibilities.
Keyword: parent functioning, grandparent functioning, receptive functioning, control functioning

Ⅰ．背景と目的

令和元年版の男女共同参画白書（内閣府男女共同参画局, 2019）によると、共働き世帯は年々増加し、平成30年時点で1219万世帯となっている。また、ひとり親世帯は平成30年で142万世帯であり令和元年時点で大きな変動はないが、平成５年の世帯数と比較すると1.5倍に増加している。このような背景から、親が子どもと一緒に過ごす時間が減少し、一方で保育園や学童保育が活用されているものの、子どもや保護者の病気や両親の出張等で緊急な対応が求められることも多く、子どもの養育において様々な困難を抱えている。このような世帯の親にとって大きな救いとなるのは、祖父母の育児支援である。狩野（2011）は、近代家族化の過程において、「孫の育児補助から積極的な育児エージェントと、祖父母の役割が変化する」と述べている。時間的・経済的余裕があり、かつ子育ての経験がある祖父母は、親役割を代替するものとして重要な役割を担っていると考えられる。

１．養育者と子どもの関わりの重要性

養育者と子どもの関わりは子どもの発達の面からみても重要であることが先行研究から理解できる。例えば子どもが小学校で生活を送るうえで、友人関係の形成・維持や学校での規範的な集団生活への適応などが

[1] 医療法人社団眞友会　希望の杜　[2] 岩手県立大学社会福祉学部

求められ、これらに対応するための社会的スキルの獲得や共感性等の人格発達などが必要となる。小石（1995）は、子どもの認知発達や社会性の発達における親子間のコミュニケーションの重要性を指摘しており、「子どもの働きかけに対して応答性が豊かであり，自発性を尊重した関わりは，子どもの情緒的な安定感をもたらすとともに，対人関係に対する積極性や自発性を育てる」と述べている。また、渡辺（2002）は小学生の人格形成に家庭での養育態度やしつけが大きく関係しているとしており、八越・新井（2007）も母親の情緒的支援が児童の社会的スキル、共感性を高めることを明らかにしている。

このように、児童期における養育者の関わり方や養育態度と子どもの能力や人格の発達は密接な関係性にあるといえる。とりわけ子どもを受け入れるという養育者の行動や日頃のしつけは、子どもの社会性の発達やこれに関する能力の習得に直接的に影響していると考えられる。

２．親の機能

子どもにとって最も重要な養育者である親の機能については、親役割や養育態度、養育スタイルといった概念で研究されている。谷井・上地（1993）は親役割行動を「子どもの人格形成に影響を与える親の子どもに対する行動で、親の子どもに対する態度や認知的側面を含むもの」としているが、本研究では谷井らの定義を参考に、親の機能を「子どもの発達や人格形成に影響を与える親の行動・態度」と定義する。この親の機能について先行研究をもとに整理したものがTable1である。ここからわかるように、先行研究で取り上げている親の機能には、「受容機能」と「統制機能」が共通にみられる。Baumrind（1967）は養育態度は応答性と統制の２つの軸の組み合わせからなるとしており、中道・中澤（2003）によると、ここでの応答性とは、「親が子どもの意図・欲求に気づき、愛情のある言語や身体的表現を用いて、子どもの意図を出来る限り充足させようとする行動」であり、子どもをあるがままに受け入れる「受容機能」と対応しているといえよう。また、Baumrindのいう統制は「子どもの意志とは関係なく、親が子どもにとって良いと思う行動を決定し、それを強制する行動」である。

金子（1981）や国谷（1988）は親の機能を母親と父親という性別役割を関連づけ、金子は母親は受容機能、父親は社会での生き方を教える機能をもつと述べている。また国谷は、父母のどちらが担うかは別として、親には、子どものすべてを承認し、許容するという母性機能と、社会的な生き方の指針や規範を示すという父性機能があるとしている。ここでの母親の機能あるいは母性機能は「受容機能」に、父親の機能あるいは父性機能は「統制機能」に対応するといえよう。

谷井・上地（1993）は親役割診断尺度において親役割を受容、干渉、分離不安、自立促進、適応援助、自信の６つに分類している。ここでの「受容」は親子のコミュニケーションの大小や親が子どもの行動、考えなどを理解する傾向を指し、文字通り「受容機能」ということができる。「干渉」は、子どもの学習や生活態度に対し、細かく何度も注意を与える傾向を示すものであり、「統制機能」と対応する。

また、辻岡・山本（1975）は親が子どもにとっている行動への子どもの認知を測定する尺度の分析から、子どもが認知する親の行動を情緒的支援、統制、自律性、同一化の４つに大別している。このうち「情緒的支援」は親が自分（子）の行動を情緒的に支持する行動であるため「受容機能」、「統制」は親が子どもの行動を統制し、制約を加える行動であるため「統制機能」に対応する。以上のことから、親の機能は大きく「受容機能」と「統制機能」の２つの機能が軸となっていることがわかる。

３．祖父母の機能

祖父母の機能についても親の機能と同様に、「孫の発達や人格形成に影響を与える祖父母の行動・態度」と定義し、先行研究を整理した（Table2）。田畑・星野・佐藤・坪井・橋本・遠藤（1996）は孫からみた祖父母の機能を調査し、祖父母がいるだけで孫が安心できたり、困ったときの拠り所となるという「存在受容機能」、祖父母が孫のことを理解しようとしたり関心を持ってくれているという「日常的・情緒的援助機能」、祖父母の姿を通して孫が一生や死について学んだり、積極的に考える機会を持つことができるという「時間的展望促進機能」、祖父母の姿から孫が祖父母や両親から引き継いだ類似性を認識したり、自分の知らない親のことについて知ることができるという「世代継承性促進機能」の４つに分類している。また前原・金城・稲岡（2000）も同様に祖父母の機能を調査し、家の歴史や伝統文化などについて教えてくれる「語り部・伝統

Table1
先行研究における親の機能

	受容機能	統制機能	自立促進	分離不安	自信	適応援助	同一化
Baumrind（1967）	応答性	統制					
金子（1981）	子どもの全てを承認し許容する（母親の機能）	社会的な生き方の指針や規範を示す（父親の機能）					
国谷（1988）	受容機能（母性機能）	社会での生き方を教える（父性機能）					
谷井・上地（1993）	受容	干渉	自立促進	分離不安	自信	適応援助	
辻岡・山本（1975）	情緒的支援	統制	自律性				同一化

Table2
先行研究における祖父母の機能

	受容機能	情緒的援助機能	人生観促進	伝承機能	世代継承性機能
田畑ら（1996）	存在受容機能	日常的・情緒的援助機能	時間的展望促進機能		世代継承性機能
前原・金城・稲岡（2000）	安全基地機能		人生観・死生観促進機能	語り部伝統文化伝承機能	
森本・中原（2011）	基本的信頼機能	英知機能	自我発達促進機能	伝承機能	

文化伝承機能」、いつでも優しく受け入れてくれたり自分の安らげる場を提供してくれる「安全基地機能」、生死や人生について教えてくれる「人生観・死生観促進機能」の３つの祖父母の機能があることを明らかにした。さらに森本・中原（2011）も女子青年における祖父母機能認知について研究を行い、祖父母機能は親には言えないことでも祖父母には話せることがある等の項目から構成されている「基本的信頼機能」、礼儀作法を教えてくれるなどの項目からなる「伝承機能」、祖父母は私の気持ちを理解しようとしてくれようとしているなどの項目から構成される「英知機能」、祖父母の姿から、自分が年をとった時どうなりたいか想像することがあるなどの項目から構成される「自我発達促進機能」の４つの機能があると認知されていることを明らかにした。

これらはいずれも、青年期における孫の視点からの祖父母機能の認知であるが、そこには共通点がみられる。田畑ら（1996）の「存在受容機能」と森本・中原（2011）の「基本的信頼機能」は、親には言えなくても祖父母には言える、祖父母を思うと気持ちが慰められるなど、機能を構成する項目が類似していたため、同質のものと考えられる。また田畑らの「日常的・情緒的援助機能」と森本・中原の英知機能は、祖父母が自分に興味・関心を持ってくれたり、自分の気持ちを理解しようとしてくれるという、どちらの機能においても因子寄与が高い項目が類似していたため同質の機能と考えられる。

「存在受容機能」や「安全基地機能」など、子や孫を受容することに関する機能がTable2でとりあげた先行研究に共通にあり、さらにこれらの機能は祖父母機能の中でも因子寄与が高くなっていることから、その重要性が理解できる。

４．本研究の目的

親の機能においては、受容機能と統制機能が親または母親、父親の機能であると示され、祖父母の機能においては受容機能が先行研究に共通して見られた。祖父母と親で唯一共通する機能が受容機能であるが、それぞれで指摘されているこの機能が同質のものであるかは、これまでの研究からは明らかになっていない。子あるいは孫に「受容」的であると受け止められる行動や場面は、祖父母と親の場合で異なることも考えられるため、本研究ではこの受容機能に焦点を当てることとする。また、統制機能については、親が持つもう一つの重要な機能と考えられるが、祖父母機能についての先行研究の中で「統制機能」を挙げているものは

なかった。しかし実際に祖父母が親の代替となる場合もあり、孫と関わるなかで統制的な行動をとっていることは少なくないと思われる。さらに、子あるいは孫に「統制」的であると受け止められる行動や場面は祖父母と親の場合で異なることが考えられるため、統制機能についても本研究で取り上げることとする。

以上のことから、本研究では祖父母の受容機能と統制機能の特徴を親の機能と比較しながら明らかにすることを目的とする。なお、親機能や祖父母機能の重要性や具体的な内容は、子あるいは孫の発達段階により異なることが考えられるため、本研究では子どもが親や祖父母と関わることが最も多いことが想定される児童期に焦点を当て、大学生を対象に児童期の親や祖父母との関わりを回想してもらうこととする。また、前原・金城・稲岡（2000）により、祖父母との同・別居等の居住形態によっても祖父母の機能が異なることが示されていることから、祖父母との居住形態（同居・近居・遠居）も確認する。

Ⅱ．研究1

1．目的　質問紙調査により、祖父母との同居・別居や距離なども含めた家族形態の分類と、その分類ごとの祖父母と父母の機能の大まかな特徴を整理することを目的とする。

2．方法

⑴**対象者**　地方公立大学の学部１～４年生の計248名から質問紙を回収し、このうち回答に不備があったものを除き、233名（男性69名、女性163名、その他１名）を分析対象とした。

⑵**手続き**　2019年10月下旬から11月上旬に質問紙調査を実施した。講義終了後に質問紙を配布し、その場で回収した。

⑶**質問紙の構成**　⑴小学校の頃の家族構成と放課後の過ごし方、⑵小学生の頃の父親との関わり（①当時の父親の就業形態、②当時の父親の自分に対する受容的・統制的行動：子どもの認知する親の養育態度尺度（姜・酒井, 2006）から、受容因子と統制因子それぞれ因子寄与が高い項目を４項目ずつ選出した。）、⑶小学生の頃の母親との関わりについて（①当時の母親の就業形態、②当時の母親の自分に対する受容的・統制的行動：尺度項目は父親と同様。）⑷小学生の頃の祖父との関わりについて（①祖父との居住形態、②当時の祖父の自分に対する受容的・統制的行動：尺度項目は父親と同様。）、⑸小学生の頃の祖母との関わりについて（①祖母との居住形態、②当時の祖母の自分に対する受容的・統制的行動：尺度項目は父親と同様。）、⑹フェイスシート（性別、年齢、学部、学年）、⑺インタビュー調査協力の承諾の可否。

3．結果　続柄（祖父、祖母、父親、母親）別の受容得点・統制得点の平均値および一要因分散分析の結果はTable3とおりである。受容得点については平均の差は有意であり（F（1,191）=88.80, p<.001),ボンフェローニの多重比較の結果、母親の受容得点は祖父、祖母、父親よりも有意に高く、祖母の受容得点は祖父、父親の得点よりも有意に高かった。また、祖父と父親の受容得点の間には有意差がなかった。統制得点についても平均の差は有意であり（F（1,191）=162.66, p<.001））、ボンフェローニの多重比較の結果、母親の統制得点は祖父、祖母、父親の得点よりも有意に高く、父親と祖母の統制得点は祖父よりも有意に高かった。祖母と父親の統制得点の間には有意差がなかった。

4．考察　続柄による受容得点及び統制得点を検討した結果、受容得点においても統制得点においても母親の得点が最も高かったことから、母親が最も受容機能と統制機能の役割を担っているといえる。これは、母親が子どもと過ごす時間が最も多く、育児も多く担っていることからだと考える。2008年の第４回全国家庭動向調査（国立社会保障・人口問題研究所, 2009）では、育児の80％以上を妻が担うケースが多数を占めていることが報告され、母親が育児に対して責任を最も感じており、実際に育児を多く担っているのも母親であるという。祖父母の育児へのかかわりに関しては、支援型の孫育児を担う祖父母が主流であり（小松・斎藤・甲斐, 2010）、家族の実態や家族意識の変容に伴い同居率が減少するなど、祖父母役割規範が希薄化している（杉井, 2006）と指摘されている。以上のことから育児においては母親が第一線で行うものであり、母親もその役割を全うすべきであると考えていることが分かる。

受容得点では母親に次いで祖母の得点が高く、祖父と父親が最も低かった。佐藤（2019）は高齢期の子育て支援においてもジェンダー化の傾向があることを示唆しており、八重樫・江草・季・小河・渡邊（2003）も、

Table3
続柄（祖父、祖母、父親、母親）別の受容得点・統制得点の平均値および一要因分散分析の結果

	父親	母親	祖父	祖母	*F*	多重比較
受容得点	3.65	4.47	3.55	3.91	F（1,191）= 88.80, p<.001）	祖父・父親＜祖母＜母親
統制得点	3.57	4.10	3.06	3.47	F（1,191）=162.66, p<.001）	祖父＜父親・祖母＜母親

祖母の方が祖父よりも子育て支援に積極的であることを指摘している。これは、高齢期になっても「女性は子育てを担い、男性は仕事」というような、性役割の考え方が大きく変化していないことが推察される。

また統制得点では、母親に次いで父親・祖母の得点が高く、祖父が最も低かった。その理由の一つに、養育責任があると考える。第一生命経済研究所（2015）によると、祖父母を対象とした調査において「子育ては、祖父母を頼らず、親自身で行うべきだ」という考えに肯定的な回答をした者は79.9％を占めていた。これより、祖父母は孫育てにおいて、養育責任を強く感じていないことが分かる。そのため、両親と比較すると孫に対して統制的な関わりが少なくなり、結果として得点が低かったと考える。

Ⅲ．研究２

１．目的　大学生が認知する親の機能と祖父母の機能の違いや感じ方の違いについて比較し、その違いの背景を明らかにすることを目的とする。

２．方法

⑴調査協力者　研究１においてインタビュー調査に同意した地方公立大学の大学生17名（女性）。

⑵調査時期　2019年11月中旬～下旬に行った。

⑶手続き　地方公立大学構内のプライバシーが保てる部屋にて、１対１で半構造化面接を行った。初めに調査目的を伝え、次にデータの取り扱い及び調査者の権利についての説明と同意の確認を行った。その後インタビューを開始した。調査時間は20～40分程度であり、インタビュー部分のみICレコーダーで録音した。

⑷調査項目　⑴小学生時の家族構成について確認、⑵小学生時に関わりの多かった祖父母の確認、⑶関わりの多かった祖父母との交流頻度、⑷受容された経験（祖父、祖母、父親、母親）、⑸祖父母から受容された経験と両親から受容された経験における、経験そのものや感じ方の違い、⑹統制された経験（祖父、祖母、父親、母親）、⑺祖父母から統制された経験と両親から統制された経験における、経験そのものや感じ方の違い。なお、「関わりの多かった祖父母」が父方か母方かについては確認していない。

⑸分析方法　インタビュー内容を逐語に起こし、①祖父・祖母・父親・母親それぞれから受容された経験、②祖父母からの受容経験と親からの受容経験の違い、③祖父母からの受容と親からの受容の感じ方の違い、④祖父・祖母・父親・母親それぞれから統制された経験、⑤祖父母からの統制経験と親からの統制経験の違い、⑥祖父母からの統制と親からの統制の感じ方の違いに該当する語りをそれぞれ抽出した。その後、類似する語りをグループ化し、ラベルをつけた。また個人が特定されないよう、名前や地名といった固有名詞、職業などは削除するなどの修正を行った。グループ化やラベルつけの作業は、４名の学生と１名の教員で確認し、分類が難しい語りについては、その都度話し合いながら行った。

３．結果と考察

⑴調査協力者の基本情報

調査協力者は17名で、インタビュー実施順にA～Qのアルファベットを付した。年齢は10代が８人、20代が８人、40代以降が１人であり、全員女性であった。内訳はTable4のとおりである。

⑵祖父・祖母・父親・母親の受容機能

受容に関する語りはTable5に示すとおり〈傾聴〉〈褒め〉など８カテゴリーに分類され、父親、母親、祖父、祖母に共通にみられたものは〈傾聴〉〈褒め〉〈関心〉であった。また、祖父、祖母のみにみられたのは〈会話〉〈遊び相手〉〈一緒に時間を過ごす〉であった。

父親の受容に関する語りで最も多くみられたのは〈関心〉であった。「ビデオとか撮ってくれたり色んな所に連れて行ってくれた」（B）や「運動会とか学校行事来てくれたし、ドッジボールの練習を一緒にしてくれた」（A）など、父親の学校行事への参加や父親との外出を通して、父親の自分に対する関心を感じていた。

Table4
調査協力者の内訳

対象	年齢	居住形態	
		祖父	祖母
A	20代	近居	近居
B	20代	準近居	同居
C	10代	準近居	準近居
D	10代	遠居	遠居
E	20代	準近居	準近居
F	10代	準近居	準近居
G	20代	同居	同居
H	10代	遠居	遠居
I	10代	遠居	遠居
J	20代	遠居	遠居
K	10代	―	近居
L	10代	近居	近居
M	10代	準近居	準近居
N	20代	準近居	準近居
O	20代	準近居	同居
P	20代	同居	同居
Q	40代以降	遠居	準近居

注）近居：徒歩・車等で15分以内、準近居：徒歩・車等で15～60分、遠居：1時間以上

Table5
続柄別の受容機能の語りのカテゴリー分類

カテゴリー	父親	母親	祖父	祖母	計
傾聴	2	11	5	10	28
褒め	2	4	6	7	18
関心	5	6	2	3	16
相談	2	7	−	5	14
理解	1	−	3	−	4
遊び相手	−	−	2	2	4
会話	−	−	1	1	2
一緒に時間を過ごす	−	−	3	−	3
計	12	28	22	28	

母親の受容に関する語りは28件と多かったが、そのうち最も多かったものは〈傾聴〉であった。「ちゃんと『うんうん、そうなんだ』って言ってくれたり、私がよく出す友達の名前も覚えてくれて」（E）など、子どもの話に親身になって耳を傾けてくれたという内容であった。〈傾聴〉は祖父母、両親すべてに共通してみられたが、母親で11件、父親で２件と大きな差がみられた。〈相談〉も比較的多く、「相談事は結構お母さんに話してて。友達とこういうことがあって困ってるんだよねみたいなことは、やっぱりお母さんに一番話していたかな」（A）など、悩みや困りごとがある際に母親を頼りにしていることがわかる。

祖父の受容に関する語りは22件で、〈褒め〉〈傾聴〉〈会話〉〈関心〉〈遊び相手〉〈理解〉〈一緒に時間を過ごす〉と最も多い分類となった。最も多かった〈褒め〉については、「『できたよ』とか『こういうことに選ばれたんだよ』ってうと、『おお、すごいねえ』とか『頑張ってるねえ』みたいな感じで言ってくれました」（A）という語りからもわかるように、祖父母を自分が頑張ったことを報告する相手として認識していることも関係していると考えられる。さらに〈一緒の時間を過ごす〉は祖父にしか見られなかった。これは、「おじいちゃんが園芸が好きで、あたしも一緒について外に出るんだけど、まあちょいちょい構ってくれたり」（G）など、自分と一緒に何かをしてくれることに温かさを感じるというものであった。

祖母の受容に関する語りは28件で、最も多かったのは〈傾聴〉であった。特に同居の場合には、「学校帰ってきて、今日何があったとかってよく私が話してたんですけど、それも淡々と聞いて。私の周りの人間関係図とかも全部理解してるみたいな」（O）等、孫の話に親身になって耳を傾け話を聞いてくれたという語りが多かった。〈褒め〉については、「『大きくなったね』って、『かわいいの着てるね』とかそうやって褒めてくれましたね」（Q）という語りからもわかるように、いいことをした時や自分の成長について褒めてくれたという語りがみられた。

⑶祖父母からの受容経験と親からの受容経験の違い

祖父母から受容された経験と親から受容された経験の違いに関する語りを分類した結果、〈褒めの量と質〉〈共感の質〉〈傾聴の質〉〈相談の受け方〉〈視点の違い〉の５つに分類された（Table6）。〈褒めの量と質〉〈視点の違い〉では、準近居や遠居のケースが多く、普段一緒にいる親が気づかないことも、たまに会う祖父母だからこそ些細なことに気付いて褒めたり気にかけたりしてくれるといった、関わる頻度の違いの影響が考えられた。また、〈傾聴の質〉では、祖父母と親どちらも傾聴はしてくれるが、親においては自分達が幼かった頃の経験との比較が入ってしまうこと、〈相談の受け方〉では、祖父母は耳を傾け話をじっくりと聞いてくれるため安心感を感じていたのに対し、親はリアクションや自らの意見を言うなど、何かしらのレスポンスを子どもにするという点が異なっていた。時代背景の違いや世代の違いから、親は相談を受けた場合

Table6
親からの受容経験と祖父母からの受容経験の違い

カテゴリー	主な語り
褒めの量と質	「色んなことを話してて褒めてもらったっていう経験が多く占めているのはおじいちゃんおばあちゃんの方かな。」(A) ／「やっぱお父さんお母さんはいつもやってることだとあんまり褒めてくれなかったりするけど」(ちょっとしたことでも)「褒めてくれたり」(I) ／「両親と比べると圧倒的に少ないですけど。でも両親よりは大きさ？みたいなのはおじいちゃんおばあちゃんの方があったかもしれない」(J) ／「おじいちゃんおばあちゃんはたぶん褒めてくれることの方が多いけど、お父さんお母さんは褒めてくれたり、こう関心をもってとか喜んでくれたりしたのはお父さんお母さんの方が強いかな」(G)「おばあちゃんに嬉しかったこととか話すとなんかすっごく喜んでくれてたような気がして、今思うと。そういう意味では、お母さんよりはおばあちゃんのほうが自分のことのように喜んでくれていた気がします。」(C)
共感の質	「おばあちゃんに嬉しかったこととか話すとなんかすっごく喜んでくれてたような気がして、今思うと。そういう意味では、お母さんよりはおばあちゃんのほうが自分のことのように喜んでくれていた気がします。」(C)
傾聴の質	「そうですね基本的には肯定的にみてくれるんですけど、自分が子どもの時と両親は割と比べることが多くて。祖父母みたいにただ褒めるよりは、『お母さんの時もっと足速い子いたよ』とか『お父さんの時は給食嫌いなものあったら残されてたよ』とか『食べるまでそこにいなさいとかあったよ』みたいな。」(I)
相談の受け方	「おじいちゃんおばあちゃんの場合は割と聞いて、傾聴って感じですかね。耳を傾けてくれるっていう感じの聞き方をしてくれる感じで。それもすごい安心感があったりとか、それはそれですごいいいなって思ったし逆にお父さんとお母さんはリアクションをめっちゃしてくれる型なんですよ。」(M) ／「なんかお父さんとかお母さんとか結構自分の意見を言う、言うっていうか「私はこう思うよ」みたいな。淡々と話聞いといてみたいな感じのときはやっぱり、なんかおばあちゃんたちの方が楽に話せてた」(O)
視点の違い	「月に１回会うからこそ分かるようなことを気にかけてくれたり心配してくれたり、話の種にもなったり…。」(I)

Table7
親からの受容と祖父母からの受容の感じ方の違い

カテゴリー	主な語り
褒めに対する感じ方の違い	「なんか根拠はないんですけど、お父さんとかよりおばあちゃんに褒められたほうがなんか嬉しいなって感じはあったので」(H) ／「両親と比べると圧倒的に少ないですけど。でも両親よりは大きさ？みたいなのはおじいちゃんおばあちゃんの方があったかもしれない、あったと思うし、嬉しかったかもしれない、そっちの方が。おじいちゃんおばあちゃんに褒められるほうが。お父さんお母さんに褒められるのも嬉しかったけど、やっぱりもっと認められる気がした」(J)
相談にのってくれたことへの感じ方の違い	「おじいちゃんおばあちゃんの場合は割と聞いて、傾聴って感じですかね。耳を傾けてくれるっていう感じの聞き方をしてくれる感じで。それもすごい安心感があったりとか、それはそれですごいいいなって思ったし逆にお父さんとお母さんはリアクションをめっちゃしてくれる…（中略）…そのリアクションがちょっと楽しくて話してみたいなってなって。そういう面で楽しかったなっていう感じがありますね」(M) ／「なんかお父さんとかお母さんとか結構自分の意見を言う…（中略）…なんかそれもそれで全然いいんですけど、そういう風に言われたくないときもあるじゃないですか」「淡々と話聞いといてみたいな感じのときはやっぱり、なんかおばあちゃんたちの方が楽に話せてたし、普通に話すときも緊張しないで話せてたかなって思います」(O) ／「そうですね基本的には肯定的にみてくれるんですけど、両親は自分が子どもの時と割と比べることが多くて。…（中略）…そういう比較して「お前らぬるいな」みたいな言い方をしてくるのでちょっと怖いなって思いながら話はしてましたね」「その真偽をたまに祖父母に確かめて、『お父さんこんなこと言ってた』『本当？』とかって」(I)
親子間と祖父母－孫間の距離の違い	「おじいちゃんとおばあちゃんに関しては、同居してなかったので何を言われても結局ちょっと他人事というか、他人事だし、ちょっとずれてたりするからあんまり気に留めてなかったです。でも親は四六時中一緒にいるというか、育ててもらってるから図星のことを言われるから重く受け止めるじゃないけど、ちゃんと考えなきゃなぁみたいな違いですかね」(E) ／「祖父母は結構褒めてくれたので褒められたときに嬉しいけど、なんか孫だから褒めてくれてるのかなみたいな気持ちもあったりして。両親から褒められると『いいことしたんだな』って思うような違いとかはあります」(D)
被理解感	「やっぱり、お父さんお母さんだとわからないことも理解してもらえることが多くて。それで、『ああ、わかってもらえてるな』っていうのはすごい大きかったです。」(M)

に自身の経験から助言をする傾向にあるのに対し、祖父母は自身の意見を控える傾向が推測された。

⑷祖父母からの受容と親からの受容の感じ方の違い

祖父母からの受容と親からの受容の感じ方の違いにおいては、〈褒めに対する感じ方の違い〉、〈相談にのってくれたことへの感じ方の違い〉、〈親子間と祖父母－孫間の距離の違い〉、〈被理解感〉の４つに分類された(Table7)。〈褒めに対する感じの違い〉については、明確な根拠はないが祖父母に褒められた方が嬉しいと感じる一方で、〈親子間と祖父母－孫間の距離の違い〉にあるように、「孫だから褒めてくれている」という、

Table8
続柄別の統制機能の語りのカテゴリー分類

カテゴリー	父親	母親	祖父	祖母	計
手伝い	2	6	2	2	12
礼儀	1	4	－	7	12
行儀	3	3	2	3	11
勉強	1	6	－	4	11
人との関わり方	3	4	1	－	8
自律	1	3	2	2	8
食べ物の好き嫌い	3	3	－	－	6
危険行為の指摘	－	－	1	－	1
計	14	29	7	18	

Table9
親からの統制経験と祖父母からの統制経験の違い

カテゴリー	主な語り
養育責任	「（祖父母は）あんまりその、例えば、『あれこれしちゃだめ』みたいなのを親ほど言わないんですよ。責任ていう、自分が育てなきゃいけない責任がないと思うので」(F)／「親には子供を育てる責任があるため、『～しなさい』が多い」(Q)
しつけの種類	「やっぱりなんか祖父母は自分が知ってることをできる限り教えようとしてくれてる感じがあって。両親は社会にでて恥ずかしくないように、なんか人に迷惑かけたりとか、あの子変だって言われないように教えてくれることがあったのかなって言う風に思います」(I) ／「みんなが知らないこと、言うなら教科書があるのが両親で、教科書がないのが祖父母みたいな」(I)
しつけの割合	「おばあちゃんの方が行儀とか作法とか言われることが多かったかな」（お母さんのほうが全般的に？）「うんうん、そうですね」(A)／「親の方がよく一緒にいるから全体的に言われる感じかな。おじいちゃんおばあちゃんは行動レベル」(B) ／「おばあちゃんには裁縫とかお行儀のことが中心で、お父さんお母さんは一般的な礼儀とか行儀とか、被るところもあるんだろうけど、全般的に言われてたっていう」(N)

Table10
親からの統制と祖父母からの統制の感じ方の違い

カテゴリー	主な語り
祖父母からの統制の受け入れ	「お母さんとかにも言われると、なんか『いやいやいや、やろうとしてんじゃん』みたいなのはあるんですけど、やっぱりおばあちゃんに言われれば、おばあちゃんのこと手伝おうとか、そうだよなって思ったり」「いいところを見せようとも思ったし、なんかお世話になってるから、何かしなきゃっていう気持ちもありました」(J) ／「家族だし、おばあちゃんだけど一緒に住んでないから、家の外の大人に言われた感じ、感覚になってて。お母さんにはちょっと甘えちゃって、『ちょっとくらいいいじゃん』って思うけど、おばあちゃんは家に一緒に住んでない大人だから、『ちょっとやらなきゃな』っていう気持ちにはなったかな」(A)／「お父さんお母さんとは毎日一緒にいたのもあって、なんかちょっと反抗みたいなのもあったんですけど、おじいちゃんおばあちゃんには別に反抗する気持ちとかなかったので、お父さんお母さんよりはすんなり入ってきてたと思います」(N) ／「確かに母から言われたほうが反発するかもしれないですね。きつい言い方をすれば、ばあちゃんの方を尊敬してたので。」(K)
親からの統制の受け入れ	「やっぱり父とか母から言われたことは大分強く、割とこう強めに残ってるんですけど。祖母とか祖父、それに比べたらちゃんと反省とかはしてたんですけど、それでも祖父とか祖母のほうがなんていうか、なんていうんですかね、こう軽く受け止めるじゃないですけど…。」(P) ／「お母さんに言われる方が受け止められるかな。おばあちゃんに反抗してたわけじゃないけど。すんなり言葉が入ってきたのはお母さんの方かな。だけど甘えて結局変わらないっていう…」(B) ／「祖父母に教えてもらうことは、丁寧に教えてくれますし、できないからって怒ったりしないので…（中略）…楽しみではありましたね。逆に両親は必要なことだから、だと思うんですけど。ちゃんとこれはできるようになんなきゃだめ…（中略）…っていう言い方が強かったので、覚えなきゃいけないことだから自分も頑張りはするんですけど、『お父さんお母さんは私のこと考えてくれてるんだ』っていうのもあるので。…（中略）…ちょっと『やりすぎ』とか『怖い』とか『言い方～』とか心の中ですごいもやもやしてましたね」(I)
統制への驚き	「おじいちゃんとかおばあちゃんからは言われなかったので、たぶん基本言われないから、たぶん言われたらちょっとびっくりするみたいな」「なんかお母さんから言われたらまあしょうがないなっていうか、ああいつものだなって思います」(H) ／「感じ方の違いは、まぁお母さんの場合はめちゃくちゃ言うので、「『またかよ』って『はいはい』って勉強するなりなんなりいうこと聞いて。おばあちゃんの場合は、『あれ？普段言わないのに』みたいになって、それで逆に気をつけようってなるみたいな感じで。お父さんの場合はまあ言わないけど、お父さんに言われてもちょっと反抗したくなってくる。」(M)

前提条件があることで、親に褒められた方がむしろ嬉しいと感じる人もいた。同じ「褒められる」ということでも、関係性によって感じ方、受け止め方が異なることがわかる。

〈相談にのってくれたことへの感じ方の違い〉については、祖父母は話を傾聴してくれるため安心感を感じたり、自分が受け入れられていると感じる一方で、親は、リアクションを多くとってくれるため楽しいと感じていたり、反対に自分の学生時代と比較する、両親の意見を言われるという理由から反発心を抱いたり、嫌だと感じていた。〈被理解感〉は、祖父母は親とは異なる視点をもっていることで、親だとわからないことも理解してもらえると感じていた。

⑸祖父・祖母・父親・母親の統制機能

統制に関する語りはTable8に示す通り〈手伝い〉〈礼儀〉など８カテゴリーに分類され、父親、母親、祖父、祖母に共通にみられたのは、〈手伝い〉〈行儀〉〈自律〉であった。〈食べ物の好き嫌い〉は父親、母親のみにみられた。

父親の統制に関する語りで最も多かったのは〈人との関わり方〉であった。「人は誰でも自分のことばっかり、自分がこのほうがいいとかっていうんじゃなくて、相手の立場とかそういうのを考えなくちゃいけないんだっていうことは、そういうことは父に言われたことはありますね」(Q) 等、他者に対する接し方など自らの生き方について教えてくれたというものあった。

母親の統制に関する語りは29件で最も多く、中でも〈手伝い〉〈勉強〉が多く、日常的に生活習慣に関するしつけの役割を担っていることがわかる。また〈自律〉については全員に共通にみられたが、母親においては、「自分のことは自分でやれっていうのはすごい言われました」(H)、「ちゃんと自分のことなんだから自分

でやりなさいとか」（P）など、子どもの自立を促す教えが多かった。

祖父の統制に関する語りは７件と少なく、孫のしつけには直接的には関わらない傾向がうかがえる。一方、祖母の統制に関する語りは18件で、最も多かったのは〈礼儀〉であった。「言葉遣いとかそういうところは言われてた気がします」（B）、「おばあちゃんは結構、箸の持ち方とか『ありがとうございます』とか挨拶しなさいとか」（D）など、言葉遣いや挨拶等の礼儀についてのしつけに関する語りが多くみられた。

⑹祖父母からの統制経験と親からの統制経験の違い

祖父母からの統制経験と親からの統制経験の違いに関する語りを分類した結果、〈養育責任〉、〈しつけの種類〉、〈しつけの割合〉の３つに分類された（Table9）。

〈養育責任〉は、親と比べ祖父母に養育の責任がないため、統制された経験が少ないという内容であった。〈しつけの種類〉では、祖父母はこれまでの人生で得てきた知識を孫に教えるのに対し、両親は一般常識について教えるという違いについての語りがみられた。〈しつけの割合〉については、祖父母は特定の行儀・礼儀について一つひとつ指摘するのに対し、親は生活全般についてしつけをするという違いがみられた。

⑺祖父母からの統制と親からの統制の感じ方の違い

祖父母からの統制と親からの統制の感じ方の違いにおいては、〈祖父母からの統制の受け入れ〉、〈親からの統制の受け入れ〉、〈統制への驚き〉の３つに分類された（Table10）。〈祖父母からの統制の受け入れ〉は、親の統制は受け入れがたく反発してしまうが、祖父母からの統制は受け入れられたという内容であった。一方、〈親からの統制の受け容れ〉においては、祖父母からの統制は受け入れがたいが、親からの統制の方が受け入れられるというものだった。〈統制への驚き〉は、祖父母からの統制の頻度が多くないため、統制されたら驚いたり戸惑うという内容であった。

親からの統制は「～しなさい」という命令や指示の形のものが多く、そのため「しなければならない」という意味合いが強くなっていた。このような統制は、反発心を生じさせる場合もあるが、説得力があると認識されれば祖父母からの統制よりも強制力があるものとなっていた。祖父母からの統制は「こういう風にしたら？」など、提案型のものが多いため、両親からの統制と比べ強制されているという感じが弱い。そのため祖父母の統制は反発心を生じさせにくいが、逆に軽く受け止められる傾向にあるといえる。

Ⅳ.総合的考察

研究１および研究２から、子や孫との関わりにおける父親、母親、祖父、祖母の受容機能・統制機能の表れとしての行動には違いがみられ、またそれに対する子や孫である大学生の感じ方も、関係性によって異なっていることが示唆された。ここではその中でも、受容機能として特徴的な〈褒め〉と〈傾聴〉の違いと、統制機能の違いの背景について考察する。

１．祖父母の〈褒め〉と親の〈褒め〉の違い

Table5からもわかるとおり、祖父母の方が親よりも孫に対する〈褒め〉の頻度や量が多いという違いがあった。Table6において、〈褒め〉の頻度や量の違いに関する語りは祖父母と準近居あるいは遠居のケースがほとんどであったことから、この要因として、視点の違いがあると考えられる。Figure1に示すように、親は毎日一緒に生活しているため子どもの成長に気付きにくいが、準近居あるいは遠居の場合のように一定期間を空けて会う祖父母は孫の細かな成長に気付きやすい。そのため祖父母は親と比べ、孫の変化に多く気が付き、それに伴い褒めの量が多くなっていると考えられる。

また、祖父母の方が〈褒め〉の対象が広いことも一つの要因であると考える。親からの〈褒め〉においては、学校での良い成績に関する褒めが多くみられたが、祖父母においては、「何をやっても、成績表を持っていけば『頭いいねぇ』って言われて、外で一緒に遊べば『運動もできるね』って言われて」など、孫の成長や何かできるところを見かけたら褒めてくれるなど、〈褒め〉の対象が広いことが分かる。これらのことから〈褒め〉が、祖父母と孫がコミュニケーションをとるための中心的な機能となっていると考えられる。

２．祖父母の〈傾聴〉と親の〈傾聴〉の違い

祖父母と親の〈傾聴〉においても違いがみられた。相談をしたり会話をする上で、祖父母は聞き役に回ることが多く、孫の話に耳を傾けるという姿勢を多くとっていた。しかし親は祖父母と比べ、子どもの話にただ耳を傾けるだけでなく、幼少の頃の自分との比較や意見をすることが多かった。対象者が認識する祖父母の受容と親の受容の違いについての語りでの〈傾聴

親	祖父母
日常的に接触 ↓ 子どもの変化に 気付きにくい ↓ 特定のものだけが 褒めの対象 ↓ 褒めの頻度・量が 少ない	たまに接触 ↓ 些細な変化に 気付きやすい ↓ 褒めの対象が 広範囲 ↓ 褒めの頻度・量が 多い

Figure1. 祖父母と親の〈褒め〉の比較

の質〉〈相談の受け方〉においても同様の違いがみられた。この要因の一つとして、Figure2に示すとおり、世代間ギャップが考えられる。親の場合は祖父母の場合と比較すると時代背景の違いがそれほど大きくないため、親は自身の経験と照らし合わせて助言をする傾向にあるのに対し、祖父母は時代背景が違いすぎることから比較をすることに意義を感じず、自身の意見を控える傾向があるのではないかと考えられる。

また、〈傾聴〉の違いを生みだしているもう一つの要因として〈養育責任〉があると考える。祖父母と比べ親の方が養育責任を感じており、またそれが統制においては統制の仕方や頻度に表れていることが分かる。そして〈傾聴〉においてはこの〈養育責任〉が、親が子どもの話に意見を言うことや親の子どもの頃との比較という形で表れているのではないかと考える。祖父母からの受容と親からの受容の感じ方の違いに関する語りの中にも、「自分が子どもの時と両親は割と比べることが多くて。…(中略)…そういう比較して『お前らぬるいな』みたいな言い方をしてくるのでちょっと怖いなって思いながら話はしてましたね」(I) という語りがあり、親の子どもの頃との比較を通して子どもへ、厳しさに欠けていることを伝えている。親は子どもを優れた人に育てなければという責任感や想いがより強いため、話を聞く際も比較や意見などをして子どもに様々なことを教えようとしているのではないかと考える。

3．祖父母と親の統制の仕方とその感じ方の違い

親の統制は「～しなさい」という指示型が多く、祖父母の統制は「こういう風にしたら？」という提案型が多くなっていた。親の統制の仕方は強制的意味合いが強く、これにより子どもが反発心を抱いてしまうと

親	祖父母
世代間ギャップ小 養育責任（強） ↓ 自分の経験との比較 話や悩みに対し意見	世代間ギャップ大 養育責任（弱） ↓ ただ話を聞く 聞き役に回る

Figure2. 祖父母と親の〈傾聴〉の比較

親	祖父母
養育責任（強） ↓ 指示 「～しなさい」	養育責任（弱） ↓ 提案 「こういう風に したら？」

Figure3. 祖父母と親の統制の仕方の比較

いう語りが多くみられた。これに対し祖父母の統制の仕方は親と比べ強制されている感じが弱いため、受け入れることができたという語りがみられた。このような統制の仕方の違いの要因として考えられるのは、〈養育責任〉である。この関係を示したものがFigure 3である。先述の通り、対象者の語りによって、祖父母と比較し親の方が〈養育責任〉を感じていること、またそれが「～しなさい」という統制の仕方に繋がっていることが分かる。また反対に、祖父母は〈養育責任〉を強くは感じていないため、強制する必要がなく、提案型が多くなると推察する。

4．まとめ

これまでみてきたとおり、親の機能と祖父母の機能には違いがあり、その背景要因として、接触の頻度の違い、世代間ギャップの程度の違い、養育責任の程度の違いが関わっていることが考えられた。その中での〈養育責任〉が、子あるいは孫との関わり方や機能を規定する中核的な要因であることが考えられた。子どもが成長し社会化する過程の中で、最も身近な成人と考えられる親と祖父母は、対象者にとってのその立場の違いならではの、多様な機能をもっていることが明らかとなった。

Ⅴ.今後の課題

本研究の研究２では調査協力者は全員女性であった。前原ら（2000）の研究によると、孫息子は孫娘より父方祖父の多くの機能を高く評価したことを明らかにしている。このように孫の性別によっても祖父母と

の関係性や関わりが異なってくると考えられる。そのため、男性にもインタビュー調査を行うことが必要であり、これによりさらに多くの祖父母機能の特徴が明らかにできると考える。

引用文献

Baumrind, D. 1967 Child care practices anteceding three patterns of preschool behavior.*Genetic Psychology Monographs* 75 43-88

第一生命経済研究所 2015 祖父母による孫育て支援のと実態と意識 Retrieved from http://group.dai-ichi-life.co.jp/cgi-bin/dlri/ldi/total.cgi?key1=field&key2=edu（2020年2月10日）

金子義蔵 1981 母親の役割 金子書房

姜信善・酒井えりか 2006 子どもの認知する親の養育態度と学校適応との関連についての検討 人間発達科学部紀要１（1）111-119

狩野鈴子 2011 祖父母の育児支援に関する文献概観 島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要 5 275-284

小石寛文 1995 人間関係の発達心理学3 児童期の人間関係 培風館

国立社会保障・人口問題研究所 2009 第４回全国家庭動向調査 Retrieved from http://www.ipss.go.jp/ps-katei/j/NSFJ4/NSFJ4_top.asp（2019年12月23日）

小松紗代子・斎藤民・甲斐一郎 2010 孫の育児に参加する祖父母の精神的健康に関する文献的考察 日本公衆衛生雑誌57（11）1005-1014

国谷誠郎 1988 家族心理学３親と子―その発達と病理 金子書房

前原武子・金城育子・稲岡ふみ枝 2000 続柄の違う祖父母と孫の関係 教育心理学研究48 120-127

森本美奈子・中原純 2011 女子青年における祖父母機能認知―続柄および関係性からの検討― 日本心理学会大会発表論文集75（0）1PM20

内閣府男女共同参画局 2019 男女共同参画白書 令和元年版 http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r01/zentai/index.html（2019年9月16日）

中道圭人・中澤潤 2003 父親・母親の養育態度と幼児の攻撃行動との関連 千葉大学教育学部研究紀要 51 173-179

佐藤淑子 2019 父母のワーク・ライフ・バランスと祖父母による孫育て―日本とオランダの比較― 鎌倉女子大学学術研究所報19 77-88

杉井潤子 2006 祖父母と孫との世代間関係：孫の年齢による関係性の変化 奈良教育大学紀要55（1）177-190

田畑治・星野和実・佐藤朗子・坪井さとみ・橋本剛・遠藤英俊 1996 青年期における孫・祖父母関係評価尺度の作成 心理学研究67（5）375-381

谷井淳一・上地安昭 1993 中・高校生の親の自己評定による親役割診断尺度作成の試み カウンセリング研究26（2）17-26

辻岡美延・山本吉広 1975 斜行回転による因子構造の交叉妥当化 関西大学社会学部紀要６（1）53-66

渡辺弥生 2002 児童期における家庭のソーシャルサポートが家庭及び学校の社会的スキルに与える影響について 法政大学文学部紀要48 203-220

八重樫牧子・江草安彦・李永喜・小河孝則・渡邊貴子 2003 祖父母の子育て参加が母親の子育てに与える影響 川崎医療福祉学会誌13（2）233-245

八越忍・新井邦次郎 2007 母親の養育態度が小学生の社会的スキル、共感性、学級適応に及ぼす影響 筑波大学発達臨床心理学研究18 33-40